

平成27年度 第1回スーパーグローバルハイスクール(SGH)運営指導委員会 記録

日時:平成27年10月21日 11時35分～12時40分

場所:千里高校 校長室

出席者:

運営指導委員

久 隆浩 近畿大学 総合社会学部 環境系専攻 教授
藤本 英子 京都市立芸術大学 美術学部 教授
朝田 秀俊 吹田市立竹見台中学校 校長
岡本 真澄 大阪府教育センター 高等学校教育推進室 主任指導主事

大阪府教育委員会事務局

平岡 香子 大阪府教育委員会事務局 教育振興室高等学校課教務グループ 主任指導主事
千里高校

林 伸一 校長
堀辺 慶一 教頭
大西 千尋 首席(SGH 事業推進主担当)
松井 活夫 教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」主担当)
近澤 一友 教諭(SGH 委員・「探究」「探究基礎」「国際理解」担当)
野村 真理 教諭(「探究」担当)

次第:

- 1, 校長挨拶・委員紹介・委員長の選出: 久委員を委員長に選出
- 2, 本校の SGH 事業の取組状況報告: 1) 構想の骨子 2) 実施状況と今後の予定 3) 現在の課題
- 3, 指導助言

○地域の課題は地域で解決していかないと持続可能性を担保していくことができない。支援の仕方でも幾つかの切り口がある。国際機関でプログラムを作る形の支援もあるし、NGO、NPO のように地域に入り込んで個別課題を解決していくという切り口もある。NGO には NGO のネットワークがある。

○労働法などの政策提案ではなく、高校生でも明日からでもできるような提案に探究を近づけていけば、実感のある提案ができる。

○グローバルな視点で将来活躍していくような高校生が社会人になるのは、頼もしいと思うのと同時に、地元の課題に対して草の根レベルでの視点も持てるようなグローバル人材が育って欲しい。

○国際問題と同じ構図がローカルにある。まずそこをトレーニングの場所として使わせていただきながら、解決をするということをやれば、そこで能力アップが図れ、それが国際的にどう通用するかという所に結びつけていくこともできる。海外に行かなくても取り組み、地域問題を解決するという貢献にもなる。そういう両輪でいくのも一つの手である。

○グローバルな課題の現場に研修に行くのも一つの方法だ。現場を経験することによって心が成長するし自分が置かれている立場がよく分かる。これにより提携先が広がる可能性もある。地域課題に取り組む NGO とタイアップするのも一つの手である。

○スーパーグローバル事業は国際的な問題、そして国際的なビジネス課題を高校生の立場で、企業・大学と連携しながらどのように解決していくかという研究テーマがあって、それに応えて千里高校の構想は立案されている。構想の主要な柱をグローバルコンパクトにしていることを活かしつつ、どう広

げて肉付けしていくかということになる。「グローバル」という考え方は重視すべき方向である。生徒の研究を深める方法の一つとして急がずに検討されると良い。

○企業や大学とのマッチングは、初めからうまくいくものではない。今後連携されていく企業それぞれの強みが見えてくる。また、大学との連携については、研究のテーマよりも研究の作法を教わることに重点を置くと良い。関係が深まればまた繋がりもできる。

○グローバルコンパクトの中で起こっている問題が実際に現地ではどのように見えているのかを現地に行って見よう、という目的で途上国に行くというやり方もある。そしてそこがビジネスにつながっていくかもしれない、というシナリオ作りもできる。

○運営委員会だけではなくて随時委員と連絡を取っていただければ、サポートさせていただきたい。

<別紙資料抜粋>

1)本校のSGH構想の骨子

1 研究開発構想名

グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画

2 研究開発の目的・目標

1)目的

国際的な課題について、ステークホルダーがWin-Winの関係となるような提案を行う力であるグローバル・マネジメント力を備えたリーダーを育成するための教育課程の研究開発。

2)目標

生徒に対し、次に掲げるグローバル・マネジメント力を育成することを目標とする。

- ① 高い社会貢献意識
- ② 国際的課題についての多面的な視点と深い理解
- ③ 国際的課題について他者と連携・協調しつつ探究する力
- ④ ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行う力
- ⑤ 高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力

→「国際文化科」を再定義する

3)研究開発の概要

① 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクト(以下、GC)の4分野(労働、環境、人権、腐敗防止)を取り上げ、GC参画企業とNGOの取組の比較、及び、GCの取組に係る日米比較という手法により多面的な視点を育むための指導法を研究開発する。

→立場や利害が対立する領域を課題研究の対象とする

② 国連・大学・企業・NGOと連携し、フィールドワーク等を通じ研究者・実践家の生き方に直接触れることにより、高い社会貢献意識とGCに係る深い理解を育むとともに、高いレベルのコミュニケーション力としての英語力を向上させるための効果的な研修計画を研究開発する。

→国際的課題に取り組む大人の姿に触れさせる

③ 生徒が互いに協力しながら連携機関等より適切に指導・支援を受け、必要な情報を収集・分析・整理する力を身につけることができる指導法を研究開発する。

→外部の教育資源の導入と論理的思考を促す指導法の研究

④ 上記①～③を通じ、ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を生徒に育むための教育課程を研究開発する。

→3年間で、「知る」、「調べる」、「提案する」へと発展させる学習場面の提供